

白鳥とカラス

『マハーバーラタ』に基づく物語

インド洋の最北端の海辺に、3人の幼い子どものいる農夫が住んでいました。1羽のカラスが庭に巣を作ると、3人の子どもたちはカラスを敬愛するようになりました。子どもたちは毎日昼食を終えると、カラスが食べるようにと残り物を庭に置きました。カラスは凝乳、米の入った甘いミルク、バターとハチミツを食べ終えると、子どもたちが彼を称賛して歌っている間、農場を気取って歩き回りました。「あなたはなんて素晴らしいカラスなのでしょう。とても立派で、つやつやしています」。カラスは子どもたちからの食べ物と称賛でうぬぼれ、間もなく自分が他のすべての生き物より優れていると思い始めました。他の生き物が子どもたちの置いた食べ物のそばにいくと、必ず彼は侵入者が飛び去るまでギャーギャー騒ぎ立て、小競り合いを仕掛けました。そして食べ物を独り占めしました。

ある日子どもたちがカラスをたたえ、空のチャンピオンと呼んでいると、白鳥の群れが頭上に飛来しました。

カラスの自慢を聞きつけた白鳥のリーダーが大空から舞い降り、ゆっくりと庭に着地しました。白鳥は言いました。「私はマーナサローワル湖から来た偉大な白鳥です。私は何年も旅をし、休まずに大海原を渡ることができます。あなたが自分を空のチャンピオンと言うなら、私はあなたに勝負を挑みます」

カラスは尊大にカーカー鳴きました。「私の飛行技術は並ぶものがない。おまえの挑戦を受けて立とう。私がどんなふうにも勝つか教えてやろう。私は101通りの飛び方ができる。舞い上がる、舞い降りる、真っ直ぐに飛ぶ、旋回する。私は高く飛び、低く飛び、ゆっくり浮かぶ。そしてどう猛に飛びかかる。今まで見たこともないようなワザを見せよう。そして白鳥よ、対戦者よ、おまえは決して私に追い付くことはできないのだ」

白鳥は静かに応えました。「カラスさん、巣立ちのとき私は1種類の飛び方を学び、その飛び方をずっとやってきました。そして私はその飛び方で行います。あなたに打ち勝つことに疑いの余地はありません」

白鳥とカラスは遠くの小さな島まで競争することに同意しました。そして彼らはずっと飛び立ちました。

白鳥はすごいスピードで島に向かって舞い上がりました。彼の長く輝く翼はしっかりと前進し、はばたくたびに恩恵と力がみなぎっていました。

「ヒュー！」カラスは稲妻のように飛びました。彼は八の字飛行し、垂直降下し、急下降し、旋回し、ぐるぐる回りました。その間、白鳥をあざけり、勝利を予言しました。

レースも中盤に差しかかったとき、カラスは体力を使い果たしていることに気づきました。息がなくなり、高度を保てなくなりました。カラスは下を見ました——暗い海がせり上がり、自分に届きそうに見えました。恐ろしさで体がしびれ、悲鳴を上げました。「もし飛べなくなったらどこに降りればよいのだろう。どうしよう。泳げないのに！」

カラスの叫びを聞いた白鳥は振り返ると、海面すれすれに飛びながら黒い翼の先で波を打ち付けているカラスが見えました。そしてザブン！カラスは水をかぶりました。

「カー、カー！ 助けて、白鳥さん、お願いだから助けてください。溺れてしまいます！」

白鳥はカラスを目掛けて降りて来ました。

「私の命はあなたにかかっています、白鳥さん」と、カラスはせき込んで言いました。「助けて！」

偉大な白鳥は海に飛び込むと、カラスを背中に乗せて、空へ舞い上がりました。白鳥は優雅にターンして、農場へ帰って来ました。庭に着地してかがむと、びしょ濡れになったカラスを、柔らかい草の上に優しく滑らせて降ろしました。白鳥はカラスに付き添い、力を取り戻すまで介抱しました。やがて、白鳥は飛び立ちました。カラスは偉大な鳥が揺るぎなく優美に飛び続けるのを見上げました。

カラスはゆっくりと巣に戻りました。自らの傲慢(ごうまん)さのために溺れかけ、まさに自分があざ笑った者に命を救われたことを悟りました。カラスはすっかり謙虚になり、自らの利己的な在り方を変えることを誓いました。彼は他の者たちに好意的になり、それぞれの鳥や生き物の中にある良い資質を認めるようになりました。その日以来、カラスは他の鳥が近くに舞い降りてもギャーギャー鳴いたり、けんかすることはなくなりました。その代わりに、進んで子どもたちがくれた食べ物を分け与え、命を救ってくれた偉大な白鳥について語りました。

『マハーバーラタ』は偉大な賢人ヴェーダ・ヴァーサによってサンスクリット語で書かれた叙事詩です。『ラーマーヤナ』とならんで『マハーバーラタ』はインド文学の最も有名な作品の一つです。それは物語と教えに満ちており、精神的な富である『シュリー・バガヴァッド・ギーター』も含まれています。